想薔薇都市

加藤周一

新潮社版

発行■昭和四十八年五月二十五日　五刷■昭和四十八年十一月三十日
著者■加藤周一（かとうしゅういち）　定価■七〇〇円

幻想薔薇都市

まぼろしのばらのまちにて

発行者■佐藤亮一　発行所■株式会社新潮社 郵便番号一六二／東京都新宿区矢来町七十一番地／電話東京（〇三）二六〇一一一一／振替東京八〇八
印刷所■塚田印刷株式会社　製本所■植木製本

© Shuichi Kato, Printed in Japan 1973
乱丁・落丁本はお取り替え致します

幻想薔薇都市まぼろしのばらのまちにて目次

歌人 *Aix-en-Provence* 7
対話 *Berlin* 25
静かな嵐 *Paris* 45
人形使いの話 *Praha* 63
I LIKE HER COOKING. *London* 79
華麗なポルノまたは…… *Bombay* 97
いつの日か我らうち勝たん *New York* 113

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

何が彼女をそうさせたのか *Vancouver* 137
小市民的反応について *Peking* 155
花の降る夜のなかで *Leningrad* 17.
どんだろう *Wien* 187
地上楽園 *Los Angeles* 205
雁信 *Kyoto* 223

挿画 浜田知明

幻想薔薇都市まぼろしのばらのまちにて

The apparition of those faces in the crowd;
Petals on a wet, black bough.

——*Ezra Pound*

歌人（うたびと）

Aix-en-Provence

Cante uno chato de prouvènço, -Mistral

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

離陸すると、眼下に地中海が拡った。その紺青の輝きの彼方に、すべては忽ち遠ざかる。夕陽に染まる白い山、真昼の糸杉、丘の斜面の葡萄畑、ラヴァンドの薫る野原、広場と噴水の町、その町に住む人々……男はそれほど美しい国を見たことがなかった。そこでは思いがけぬことが起り、瞬く間に時が経ち、永く再びその国にもどることはないだろう。音楽にひきこまれて恍惚とした時間が、その曲の最後の和音と共に去ってかえらぬように。ある年の夏眩しい光のなかで出会った人が、その夏の終りに消えて再び二つの生涯の交ることがないように。その国を離れてゆく旅客機のなかで、男は行先を考えていなかった。その国は遠ざかり、海のなかの小さな島となり、その町は無限に遠い一点となる。と同時に、その町のなかの、行き交う人々のなかの、たったひとりの女は、町よりも大きくなり、野原よりも拡り、男の世界の全体となった。

海のなかに島があり
島には白い町があり
町には多くの人が住み
そのなかの一人に
私が会い
（みどりの木蔭）
矢のように時が去り
（沖から白い波が寄せ）
そのひとに別れて
（私の息はとまり）
時が経つと共に
島は小さくなり
そのひとは大きくなり

海も町も人々も
そのひとのなかに含まれ

男は南仏のエックス・アン・プロヴァンスの小人数の集りで話をした。何の話をしたかは、重要でない。重要なのは、建物が十八世紀で、入口を入った正面に、繊細な細工の鉄の手摺りのある階段が、優美な曲線を描きながら、二階へつづいていたということである。それは夏で、窓を開くと、庭の蟬の声が聞えた。話のあとで、女が近寄って来たときに、男はふと何処かで会ったことのあるひとだという気がした。その感じは、強かったが、たしかにそんなことのあるはずはなかった。小柄で、痩せて、その小さな身体によく合った落着いた色の服を着ていた。そういう機会によくあるように男の話の内容に触れることはしないで、思いがけなくも、女の方が巴里で男の噂を聞いたことがあるといった。

「あなたはこの町の生れ?」と男は、いくらか漠然と、いった。

「いいえ、ここの中学校で教えているだけです。この国を御存じかしら?」

教えているのは英語だということだったが、女はフランス語で話していた。(後になってか

ら、「もしプロヴァンス語で話すことができたら、どんなによいだろう、」と半ば冗談のようにいったこともある)。男はその国へはじめて来て、地理も、人情も、むろん言葉も知らなかった。

「それでは私の町の名まえも御存知ないでしょう、ヴァントゥウの山に近いところ……」

「あなたの国を見たいと思う、ローヌの水も、古い町も、」と好奇心の強い男は思っていたとおりのことをいった。

「そうね、ほんとうに美しい国です、」と女は素直にいった、「スペクタキュレールではないけれど。」

「ぼくは雄大な自然や奇勝奇岩を探さない、北米に十年住んでも、ナイアガラ見物には出かけないでしょう、」と男はもう一度いった。

女は週末まで町をはなれることができなかった。男は長い旅の予定を変えて、女の生れた国を訪ねるために、週末までエックスの滞在をのばすことにした。

その町の料亭の露台には、絹の肌触りの微風があった。庭の繁みを透して、街の灯が夜の海

のいさり火のようにきらめくのが見えた。食事の後で、露台の静かな一角の丸い卓をはさみ、男と女は相対しながら、長い間どちらからも立ちあがろうとしなかった。

「人を愛することは、もうないでしょう、あまり苦しいことだから、」と女は静かな声でさりげなくいった。

その細い肩から薄い服地の襞が優雅に流れ落ち、話しやめると、口もとには、古風な仏像のように、遠く離れた、しかしあたたかいほほえみが漂った。おそらく女が充分に眺めてきた世の中の有為転変の、その渦中でのさまざまの情念のすべてを通りぬけた落ち着き、かぎりない一種の優しさ、聡明さと敏感さの重ね合わされたある微妙なものが、そこにあった。男は吸いこまれるようにじっと見つめたまま、どれほどの時が経ったのかわからない。

「お疲れ？　行きましょうか、」と女がいった。

「いや、いつまでもここにいたい、かぎりなく、」と男は我にかえり、少しあわてたように、口走った。

「大げさね。」

それから女は、土地の伝説を語った。昔、美しい貴婦人が、旅人の恋を受け入れるのに、条件を設けた、という。大きな岩山を穿って、泉の噴き出したときに、その恋は叶えられる。そ

ういわれた通り旅人は一心に岩を掘り、貴婦人は待っていたが、どれほど掘っても、またどれほど待っても、岩から水は湧きださない。とうとう七年の歳月が経った。そして遂に岩山の絶壁から、ヴォークリューズの泉が激流となって噴き出したときに、待ちきれなくなった貴婦人は、もう他の男と結婚していた。その不幸な恋人が、どうなったかは、わからない。それはアレッツォの詩人ペトラルカがヴォークリューズでラウラに会うよりも、はるかに遠い昔の話である……

男はかぎりなくその話を好み、少し早口の女の語り様を好んだ。またそれ以上に、女が低い声で暗誦するミストラルの、プロヴァンス語の抑揚に、いうべからざる甘美な音楽を聞いた。意味はわからなかったし、女の声が甘かったわけではない。しかしそこには、松林の風と透き透った夏の光、また静かな情熱の昂りと、みずからの運命をすすんで引受ける人の心、――女の、あるいはその国の、つまるところ男にとっては分ち難い一つの魂の、質とでもいうほかないものが、言葉の抑揚と共に、流れていた。《*Vole qu'en glòri fugue aussado/Coume uno reino, e caressado/Pèr nosto lengo mespresado,……*》

「われらが蔑まれた言葉の愛撫」は、「女王のような栄光」と共にあると、詩人にそういわせずにはおかないような何ものかが、今は話す人も少いその言葉のなかにはあって、それは到底

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c